

連続最適化のための進化戦略の数理演習課題

秋本洋平 (筑波大学 / 理研 AIP / 大阪大学)

2025年8月28–30日 統計数理研究所
連続最適化および関連分野に関する夏期学校 2025

問1 Truncated Additive Drift の証明

講演資料に示した Truncated Additive Drift の定理を証明する。証明したい命題は以下の通りである。

命題 Let $\{(X_t, \mathcal{F}_t) : t \geq 0\}$ be an integrable adapted process in \mathbb{R} and $X_0 = \beta_0$. For $\beta < \beta_0$, let $T_\beta^X = \inf\{t : X_t \leq \beta\}$ be the first hitting time of the set $(-\infty, \beta]$. If there exist $A \geq B > 0$ such that

$$\mathbb{E} \left[\max\{X_{t+1} - X_t, -A\} \mathbb{I}\{T_\beta^X > t\} \mid \mathcal{F}_t \right] \leq -B \mathbb{I}\{T_\beta^X > t\}, \quad (1.1)$$

then the expectation of T_β^X satisfies

$$\mathbb{E} \left[T_\beta^X \right] \leq \frac{A + \beta_0 - \beta}{B}. \quad (1.2)$$

(1) 以下のように確率過程 $\{Y_t : t \geq 0\}$ を定義する： $Y_0 = X_0$ および

$$Y_{t+1} = Y_t + \max\{X_{t+1} - X_t, -A\} \mathbb{I}\{T_\beta^X > t\} - B \mathbb{I}\{T_\beta^X \leq t\}. \quad (1.3)$$

このとき、任意の $t \geq 0$ について $\mathbb{E}[|Y_t|] < \infty$ となることを、 $\mathbb{E}[|X_t|] < \infty$ と数学的帰納法により示せ。

(2) $T_\beta^Y = \inf\{t : Y_t \leq \beta\}$ は $T_\beta^X \leq T_\beta^Y$ を満たすことを示せ。

(3) $\{Y_t\}$ についてのストッププロセスを $\tilde{Y}_t = Y_{\min\{t, T_\beta^Y\}}$ と定義する。このとき、

$$\mathbb{E}[\tilde{Y}_{t+1} \mid \mathcal{F}_t] \leq \tilde{Y}_t - B \mathbb{I}\{T_\beta^Y > t\} \quad (1.4)$$

が任意の t について成立することを示せ。

(4) 下に有界な場合の加法的ドリフト解析の証明を参考に、以下を証明せよ：

$$\mathbb{E} \left[T_\beta^X \right] \leq \frac{A + \beta_0 - \beta}{B}. \quad (1.5)$$

問2 Hit-and-Run アルゴリズムのドリフト下限の導出

講義資料では Spherical 関数において、Hit-and-Run アルゴリズムが (1+1)-ES のドリフトの下界を与えることを示した。ここでは、任意の関数において、Hit-and-Run アルゴリズムがドリフトの下界（その結果 EFHT の下界）を与えることを確認する。

(1) 確率過程 $X_t = \log\|m_t - x^*\|$ に対して、確率過程 Y_t を以下のように定義する： $Y_0 = X_0$ かつ

$$Y_{t+1} = Y_t + \min\{X_{t+1} - X_t, 0\}. \quad (2.1)$$

このとき、 $\{Y_t\}$ は単調非増加系列であり、 $T_\beta^X \geq T_\beta^Y$ となることを示せ。

(2) 確率過程 Y_t のドリフトについて

$$\mathbb{E}[Y_{t+1} - Y_t \mid \mathcal{F}_t] \geq \mathbb{E} \left[\log \frac{\|x_t - x^*\|}{\|m_t - x^*\|} \mathbb{I}\{\|x_t - x^*\| \leq \|m_t - x^*\|\} \mid \mathcal{F}_t \right] \quad (2.2)$$

が成立することを示せ。

(3) Hit-and-Run アルゴリズム (各ステップにおいて $z_t \sim \mathcal{N}(0, I)$ をサンプルし, $\sigma_t^* = \operatorname{argmin}_{\sigma \geq 0} \|m_t + \sigma z_t - x^*\|$ を後付けで計算し, $x_t^* = m_t + \sigma_t^* z_t$ とするアルゴリズム) を考えることで,

$$\log \frac{\|x_t - x^*\|}{\|m_t - x^*\|} \mathbb{I}\{\|x_t - x^*\| \leq \|m_t - x^*\|\} \geq \log \frac{\|x_t^* - x^*\|}{\|m_t - x^*\|} = \log(\sin(\theta_t)) \mathbb{I}\{\theta_t \leq \pi/2\} \quad (2.3)$$

となることを示せ. ここで, $\theta_t \in [0, \pi)$ は z_t と $x^* - m_t$ の間の角度を表すものとする.

(4) $d \geq 2$ のとき $\mathbb{E}[\log(\sin(\theta_t)) \mathbb{I}\{\theta_t \leq \pi/2\} \mid \mathcal{F}_t] \geq -1/d$ となる事実を用いて, $d \geq 2$ の場合の $\mathbb{E}[T_\beta^X]$ の下界を求めよ.

問 3 強凸かつリップシツ平滑な関数が Assumption 1 を満たすことの確認

目的関数 $f(x) = g(h(x))$ が以下の性質を満たすとする: $g: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ は狭義単調増加関数, $h: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ は連続的一階微分可能であり, 任意の $z, \Delta \in \mathbb{R}^d$ について

$$\frac{L_\ell}{2} \|\Delta\|^2 \leq h(z + \Delta) - h(z) - \Delta^\top \nabla h(z) \leq \frac{L_u}{2} \|\Delta\|^2. \quad (3.1)$$

このとき, Assumption 1 を $C_\ell = \frac{1}{V_d} \sqrt{\frac{L_\ell}{L_u}}$, $C_u = \frac{1}{V_d} \sqrt{\frac{L_u}{L_\ell}}$ について満たすことを示せ. ここで, $V_d = \frac{\pi^{d/2}}{\Gamma(d/2+1)}$ は d 次元単位超球の体積の d 乗根を表す.

問 4 Assumption 1 のもとで成功確率がバウンドされることの証明

Assumption 1 を仮定すると成功確率のバウンドが得られ, これが (1+1)-ES の一次収束の証明上重要な役割を果たす. ここでは, Assumption 1 のもとで成功確率のバウンドを導出する.

(1) 成功確率が以下を満たすことを示せ:

$$p_0^{\text{succ}}(\bar{\sigma}; m) \leq \Phi\left(\bar{B}\left(0, \frac{C_u}{\bar{\sigma}}\right); 0, I\right). \quad (4.1)$$

ここで, $\Phi(\cdot; 0, I)$ は多変量標準正規分布のもとの確率測度を表す.

(2) 成功確率が以下を満たすことを示せ:

$$p_0^{\text{succ}}(\bar{\sigma}; m) \geq \Phi\left(\bar{B}\left(\left(\frac{(2C_u - C_\ell)}{\bar{\sigma}}\right) e_1, \frac{C_\ell}{\bar{\sigma}}\right); 0, I\right). \quad (4.2)$$